

有形民俗文化財
【民俗資料】

いしがき し かむら とのしろ はたがしらぼん おおかわ はたがしらぼん
石垣四箇村 登野城の旗頭本、大川の旗頭本
いしがき はたがしらぼん あらかわ はたがしらぼん
石垣の旗頭本、新川の旗頭本

指定年月日／2007（平成 19）年 6 月 19 日 所在地／登野城 4-1（八重山博物館）



左から登野城・大川・石垣・新川の旗頭本

石垣四箇村とは、登野城村、大川村、石垣村、新川村のことで、現在の字にあたる。四箇村のプーリィ（豊年祭）では、神々へ豊作の感謝と祈願のため、旗頭が立てられる。旗頭は神々への奉納だけではなく、村の象徴でもあり、そのデザインには独創性が求められた。そのため、旗頭の絵図

には寸法・色彩など細密な注解をつけ、旗頭を立てた時期や場所を記録し、村々で「旗頭本」として大切に保管されてきた。四箇村の旗頭本は、登野城の旗頭本 1 冊、大川の旗頭本 3 冊、石垣の旗頭本 1 冊、新川の旗頭本 5 冊からなり、1780 年から 1926（大正 15）年までの絵図や記録が残されている。

登野城の旗頭本には、明治期の豊年祭や天長節の記録があり、天長節の時に各村が立てた旗頭の絵図や記録も見られる。大川の旗頭本には、19 世紀から大正期までの絵図や記録が収められているが作者は不明である。石垣の旗頭本には、識名仁屋信守が 1842 年に旗頭本を寄進したことを示す文書が添えられている。新川の旗頭本は、1895（明治 28）年の天長節や 1899（同 32）年の豊年祭の時の旗頭の記録などがある。

旗頭自体は県内各地にあるが、旗頭を記録した文書資料は大変希少であり、八重山のみならず、沖縄県の民俗行事の変遷を理解するうえでも貴重な資料である。

県指定

記念物
【史跡】

ひら え むら い せき
平得アラスク村遺跡

指定年月日／1981（昭和 56）年 8 月 13 日
所在地／平得 702-1・外



平得村の伝承によると、大昔石垣島に大きな地震が起こり、島人のほとんどが亡くなってしまった。しかし、2 人の兄妹が災厄を逃れ、平池と呼ばれる池のほとりに住み着いた。やがて、妹は神託によって処女懐胎し子どもが生まれた。次第に子孫は繁栄し、ヘーギナー村となった。そこからアラスク村へ移動し、南下するようにウイスズ村、ナカントウ村、そして現在の平得村へと移動したという伝承がある。

平得アラスク村遺跡は、1984（昭和 59）年に県教育委員会によって発掘調査が実施され、13 世紀中頃から 15 世紀頃の中国製陶磁器、島で焼かれた中森式土器などが出土している。しかし、13 世紀から 14 世紀の資料の出土は少なく、ほとんどは 15 世紀の資料であることから、15 世紀を中心とした遺跡であることが分かっている。屋敷跡と思われる石積みの痕跡や、アラスクバルカーと呼ばれるウリカー（降り井戸）も残されている。

平得村の村落移動の変遷や、15 世紀頃の八重山の村落形態を知るうえで貴重な遺跡である。